

昭和廿年六月廿一日

一、校内ノ土地ヲ精査シテナホココニ食料トナ
 ウ指導セラレタシ、生徒ノ食用ニ供スベキ
 シメテハ如何、校外ニ遠ク土地ヲ求ムル
 言フ便宜ヲ考ヘテ充分活用セラレタシ

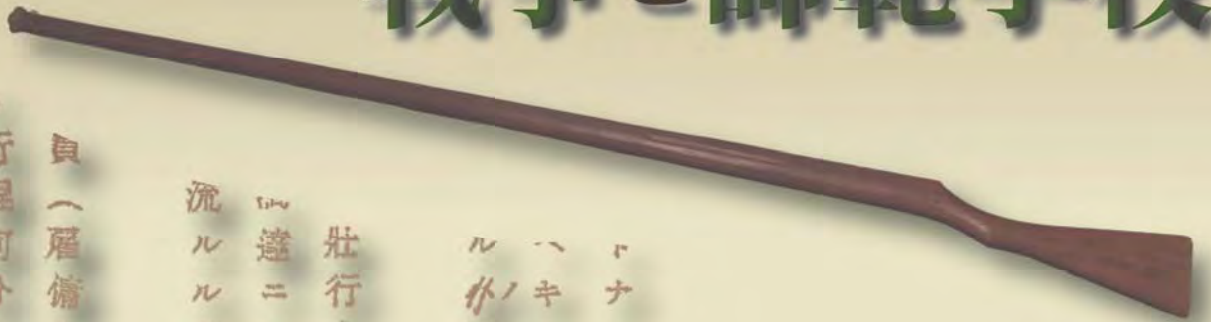
一、學校ニ於ケル諸會合催シニ於テ例ヘバ
 ス挨拶感想等ハフベテ表^種、明明、週
 スルモノタルベク消^種感傷ノ氣分ニ
 弟各々嚴ニ戒シメラレタシ

一、兩部及兩附屬、青^種、單邊ノ空^種
 地ノ調査督ヲ作製シ學校迄ノ徒、
 末日迄ニ報告アリタシ



京都・伏見の

戦争と師範学校



トナルベキモノヲ種^種ルヤ
 ハキモノヲ生徒自身ニナサ
 ルハ不便ヨリ校内ニアリト

壯行式、離任式等ニ於テナ
 以^種達ニシテ必ズ戰意昂揚ニ資
 流ルルガ如キコトナキヤウ^種

負(雇傭員スベテ)ノ住宅所在
 行程何分ナルカヲ附記シテ六月

以 上

ごあいさつ

かつて伏見は「軍都」でした。

本学だけでなく、京都医療センター、聖母女学院、龍谷大学などが現在ある場所はすべて、かつての陸軍施設の跡地です。戦時下の伏見のすがたを知ることは、戦争を身近なものとして考えなおす契機になるのではないかと思います。

本学の前身である師範学校を卒業した教師が、軍国主義が強まるなか、軍国少年、軍国少女を生みだしたことは、まぎれもない事実です。1943年（昭和18年）、新たな師範教育令が布告され、「皇国ノ道ニ則リテ国民学校教員タルベキ者ノ錬成」が師範学校の目的とされたのです。京都府師範学校は女子師範学校とあわさって、官立（国立）の京都師範学校となりました。

人はともすれば、現在の価値観から軍国主義や軍国教育を断罪し、もって事終われりとしがちです。そうではなく、当時の文脈のなかであらためて軍隊や師範学校をとらえ、そこから現在を生きる私たちのありようを見つめなおしたい――。

その思いをいだいて、この企画展を地域の方々、教師をめざす若者に捧げます。

最後になりましたが、本企画展の開催にご尽力いただきましたの方々、ご協力くださいました諸機関に、厚くお礼を申し上げます。

2012年（平成24年）11月

京都教育大学教育資料館館長

太田 耕人

<表紙デザイン>

学校での教育内容や人々の生活は、戦争によって大きく様変わりしました。当時の京都師範学校長が出した文面（学校の諸会合を戦意昂揚の場とするように指示する学校長令達第12号）を、軍事教練で用いられた木銃や戦場で着用された鉄帽（立命館大学国際平和ミュージアム所蔵）で上下に分割することで、さまざまな事柄が断ち切られた様子を表現しています。基調色には、軍都「伏見」のイメージカラーであるカーキ色を用い、タイトル色には、京都教育大学のキャンパスやまなびの森ミュージアムのイメージである緑色を、平和への願いを込めて使用しました。（古原）

【凡 例】

- ・本冊子は、2012年（平成24年）11月10日（土）から同年12月7日（金）まで、京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアムで開催する、2012年度秋季企画展「京都・伏見の戦争と師範学校」の解説付き図版目録である。
- ・展示は、村上登司文（教育学科教授）が担当し、吉江崇（社会科学科准教授）と古原朋子（教育資料館非常勤職員）が協力した。展示の一部については、武島良成（社会科学科准教授）が所蔵資料の貸与および解説の監修をおこなった。
- ・本冊子に掲載した図版および解説は、展示品のうちの一部である。
- ・解説文の執筆は、村上登司文および吉江崇がおこなった。担当した解説文の末尾に執筆者の姓を記した。
- ・本企画展の開催にあたり、下記の各機関に資料の貸与や資料の複写など、多大な協力を得た。ここに記して謝意を示したい。（五十音順）
京都府立総合資料館 国際日本文化研究センター
聖母女学院 立命館大学国際平和ミュージアム

皇国のために命を捨てよと教えられた時代

—京都師範学校と歩兵第9連隊のつながり—

村上 登司文

(教育学科教授)

昭和の前半は戦争の時代といわれる。1931年(昭和6年)に始まった満州事変は、1937年から日中戦争となり、1941年にはアジア太平洋戦争へと拡大し、教育全体が皇国主義と軍国主義に染まっていった。1941年に、国民学校令が公布され、それまでの小学校が国民学校と改称された。国民学校は、「皇国の道に則りて初等普通教育を施し国民の基礎的錬成をなす」(現代仮名遣いに変更)ことが目的とされた。そこでは、皇国(天皇の統治する国)に生まれたことを喜び、皇国の使命を自覚させる教育がおこなわれることになった。1943年には師範教育令が公布され、師範学校は、「皇国の道に則りて国民学校教員たるべき者の錬成をなす」場所になった。

皇国主義思想を信念とする長岡弥一郎が京都師範学校に1945年1月に赴任する。その長岡校長が終戦前後に作成した文書類が、2009年(平成21年)に京都教育大学事務局で見つかった。今回の企画展では、長岡校長が発した令達のコピーを綴って展示している(閲覧可)。それにより敗戦を挟んだ1年あまりの間、戦争に翻弄される師範学校の様子を知ることができる。

長岡校長は次のような令達を出す。1945年4月に「金属の回収」、5月に「日曜日も休日としない」、「学校内で菜園づくり」、6月に「部下の生死を握る重大なる責務の認識および戦意高揚に資する挨拶」、7月に「空襲頻繁化のなかでの勤務状況の確認」、8月に「終戦大勅への対応」、9月に「学徒戦死者慰霊祭の実施」、10月に「ポツダム宣言への対応(民主化)」、1946年1月に「御真影の奉還」、4月に「修身・国史・地理科授業停止への対応」、などについて指示している。

1945年5月に長岡校長は、戦況が悪化して空襲が激しくなり、死の危険と隣り合わせの動員学徒に付添う教官が持つべき心得を指示した。「付添教官は生徒の死命を握る重大なる責任を担う者として、深く敬意を払う者なり。ゆえに教官は、一言一行といえども生徒の信頼を失うがごときこと無きよう。否、教官の下には莞爾かんじ [にっこり] として死につくだけの信頼感を持ちいるよう細心の配慮ありたし(学校長令達第9号)」と、本土決戦が近い中での緊迫した状況が見える。

「教育勅語」が1890年(明治23年)に発布されて以降、国民教育をおこなうために教科書は天皇への忠義を教えた。日中戦争の最中の1941年に発刊された教科書(第5期国定教科書)においては、戦争遂行のために児童にも死に方を教える。そうした皇国主義的・軍国主義的な教材は、修身教科書ばかりではなく、算数、理科、音楽、習字、図画などの教科書にまで広がっている。天皇や国のために命を捨てよとか、いかに死ぬかを説く教材が多くなる。極端なナショナリズムに走った教科書の姿を見ることは、教育が「教化」の手段となった時の怖ろしさを知ることになる。

伏見が軍都といわれていた時代がある。なぜ伏見の深草に「師団街道」があるのか不思議に思う人もいるだろう。表1に示した陸軍施設が、深草を南北に走る琵琶湖疎水の東西に広がってい

た。京都教育大学の近くにある聖母女学院の本館は、旧第16師団の司令部庁舎であった。「師団」は日本陸軍の編制の最大単位であり、歩兵連隊だけでなく、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵しちゆう(食料・被服・武器・弾薬など軍需品の輸送をおこなう)といった全ての兵種が集まり、それだけで戦争ができる単位の部隊であり、総勢1万人以上となる。伏見には第16師団の部隊のほとんどがあり、師団街道の両側にある陸軍施設の広がりを見ることで、戦争を遂行する陸軍組織の巨大な構成を想像することができる。伏見には騎兵連隊や輜重兵大隊が駐屯し、軍馬が多かったことから次のようにいわれた。「伏見の町は何色? 陸軍のカーキ一色。音は? 軍歌と馬のかっぱかっぱと歩く音。どんなにおい? 馬糞のにおい。肥料に馬糞を拾った。」(伏見探勝会『軍都伏見の跡』1995年)

京阪電鉄をまたぐ第二軍道の疎水に架かる橋は今でも「しだんばし」と呼ばれている。その橋下をのぞくと、陸軍のシンボルマークの「★」が橋脚頭部に浮き彫りにされている。これは陸軍兵士用の鉄帽の星と同じ形である。当時京都では、臨時召集令状(俗に赤紙)を配達された臨時召集応召員は、「師団前駅」(現藤森駅)で降り歩兵第9連隊に入営した。展示した臨時召集令状を近くでよく見ると、到着地は京都市伏見区深草藤森町の歩兵第9聯隊(連隊)営内とある。

京都教育大学の藤森キャンパスは、戦前は歩兵第9連隊が駐屯し、戦争の仕方を教える場所であった。昔は「兵士」を育て、今は「教師」を育てる。つまり、昔は「いかに軍人になるか」、今は「いかに教師になるか」を、若者は学んでいる。しかし、戦時中は軍隊だけでなく、学校でも「国のためにいかに死ぬか」を熱心に教えた。1943年9月に繰り上げ卒業した京都師範学校男子部の学生132名の約半数の60名が、学徒兵としてそのまま軍隊に入隊した。その生徒達の多くは、当時京都師範学校のあった小山南大野から、歩兵連隊のあった深草藤森に直行したと思われる。歴史の中で時空を超えて、京都師範学校と京都教育大学が繋がっているといえよう。

終戦後、占領アメリカ軍部隊が歩兵連隊兵営を接收し、一時期「キャンプ・フィッシャー」と呼ばれた。アメリカ軍が撤収した後の国有地に京都学芸大学が1957年に移転し、現在の京都教育大学の藤森キャンパスとなった。伏見区深草では広大な陸軍施設が消えて、その多くが学校や病院等の公的施設、そして公営住宅になった。その一つが京都教育大学のキャンパスであり、現在まで平和と民主主義に基づいた教員養成の役割を担ってきた。

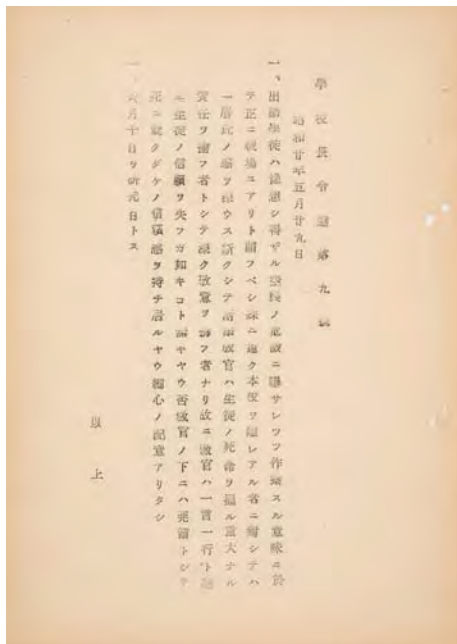
表1 伏見区深草における陸軍施設などの機能的連関

機能	施設など
組織の頭脳	第16師団司令部、歩兵第9連隊区司令部、第19旅団司令部
手足の働き	歩兵第9連隊、騎兵第20連隊、野砲兵第22連隊、輜重兵 <small>しちゆう</small> 第16大隊
必要資材の調達	京都兵器支廠
訓練する場所	深草練兵場、射撃場
軍隊の移動経路	師団街道、第一軍道、第二軍道、第三軍道、師団橋、師団前駅
病気やけがの治療	京都衛戍病院(陸軍病院)
兵士の規律保持	京都憲兵隊、衛戍監獄 <small>えいじゅ</small>
殉職者の顕彰	陸軍墓地

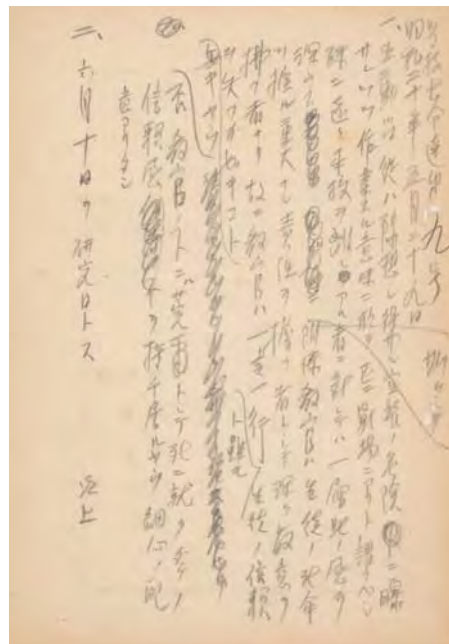
戦時下の京都師範学校

京都師範学校長作成文書

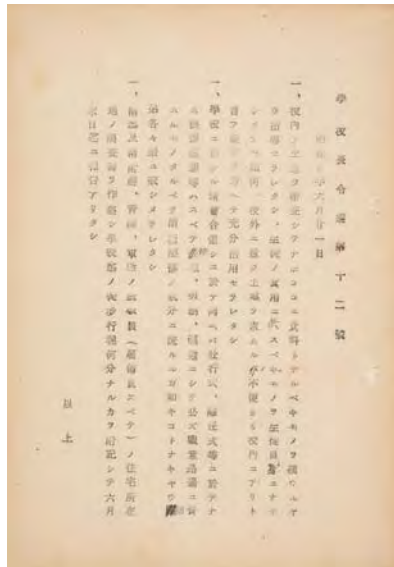
京都師範学校長 長岡弥一郎(在任:1945年(昭和20年)1月~46年11月)が作成した文書を綴ったもの。教職員向けに出された令達(第24号以降は通達と改称)を中心として、式辞や弔辞、式次第、行事予定表、戦後に作られた教育方針(英訳もあり)など、その内容は多岐にわたり、1945年2月から、終戦をはさんで翌年7月までのものが存在する。なかでも、第25号を除いて第3号から第30号までが残存する令達(通達)には、そのほとんどにおいて、活字化され印刷・配布されたものの他に、長岡の筆による草稿が存在し、そこから長岡の推敲のあとがうかがえる。中学校教諭から文部省教学官の道へ進んで京都師範学校に赴任し、戦後になると一転、GHQの教員適格審査で不適格とされて休職となる長岡の、戦前から戦後にかけての思想の変遷をたどることができる貴重な資料である。(吉江)



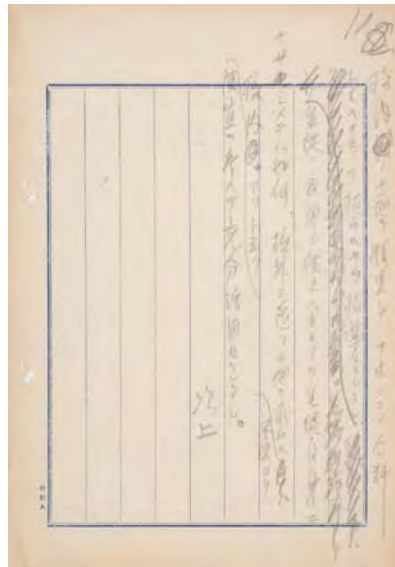
学校長令達第9号



学校長令達第9号(草稿)



学校長令達第12号



学校長令達第12号(草稿)



戦災者に対する諸手当一件

学徒勤労動員において死傷した生徒に対しては、師範学校を通じて傷病手当などが企業から支給された。本資料は、それに関する師範学校の会計書類を綴ったもので、1945年(昭和20年)10月から翌年1月にかけての書類を中心とする。本土空襲が激しさを増すなか、名古屋の住友(扶桑)金属工場では、空襲によって1名の師範学校生徒が戦死し、少なくとも5名が負傷した。舞鶴の海軍工廠においても、9名が戦死したほか、5名以上が負傷したようである。手当は、企業が師範学校へ小切手を送付し、学校が各家族へ送るというもので、企業から学校への小切手送付書とそれに対する領収書の写し、学校から家族への小為替送付書の写しとそれに対する領収書が綴られている。本資料の末尾にある戦時特殊損害保険金領収書からは、住友金属工場に72名の生徒が動員されていたことが判明する。(吉江)



教練用木銃

軍事教練で用いられた木製の練習銃。長さ164cmを測り、銃床部分に「京一番 松宮保」との記載がある。京都府師範学校における軍事教練は、1883年(明治16年)12月に改正された徴兵令をうける形で、翌年4月に歩兵操練科が設置されたことから始まり、1925年(大正14年)の陸軍現役将校学校配属令によって、歩兵操練(兵式体操)から教練へと移行して、終戦まで続けられた。他府県の師範学校の事例からは、操練用の銃器が、およそ3人に1挺の割合で陸軍省より支給されたこと、太平洋戦争末期には教練用の銃も供出する必要が生じ、教練にはもっぱら木銃が用いられるように変化したことが指摘されている。本資料も、師範学校の教練のなかで使用された練習銃と推定されるが、銃床に記された「松宮保」という名は、卒業生名簿からは確認できず、「京一番」が意味するところも不明である。(吉江)

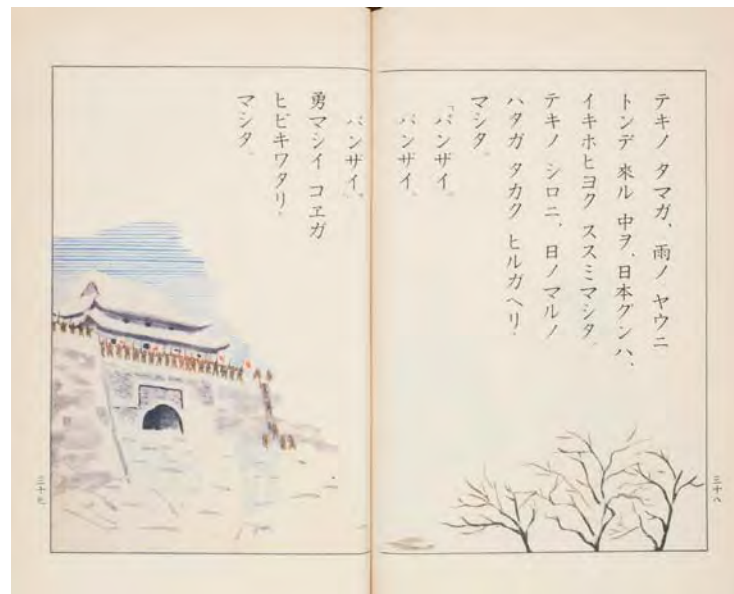


戦時中の教科書

国民学校における教科と科目

1941年(昭和16年)に改称された国民学校は、6年制(1年から6年)の初等科と、その上の2年制(1年と2年)の高等科の課程にわかれる。国民学校で学んだ教科と科目を下の表に示す。本企画展では主に初等科で使用された教科書を取り上げた。文部省により1904年(明治37年)に発刊された国定教科書が第1期で、1941年から発刊された国定教科書は第5期にあたる。1941年に1・2年生の教科書が改訂され、1942年に3・4年生、1943年に5・6年生の教科書が順次改訂された。第5期の教科書の内容は、当時の陸軍省が教科書編集に強く干渉したものになっている。一方で、初等科1・2年生用の教科書には、次のように児童にわかりやすい名称がつけられていた。修身(ヨイコドモ)、国語(ヨミカタおよびコトバノオケイコ)、算数(カズノホン)、音楽(ウタノホン)、習字(テホン)、図画(エノホン)などである。(村上)

課程	教科	科目
初等科(1年~6年)と高等科(1年・2年)に共通に設置された科目	国民科	修身、国語、国史、地理
	理数科	算数、理科
	体練科	体操、武道(男子)
高等科のみに設置された科目	芸能科	音楽、習字、図画、工作、裁縫(女子)
	実業科	農業、工業、商業、水産 外国語、その他必要な科目



ヨイコドモ 上 (国民学校初等科1年生用)



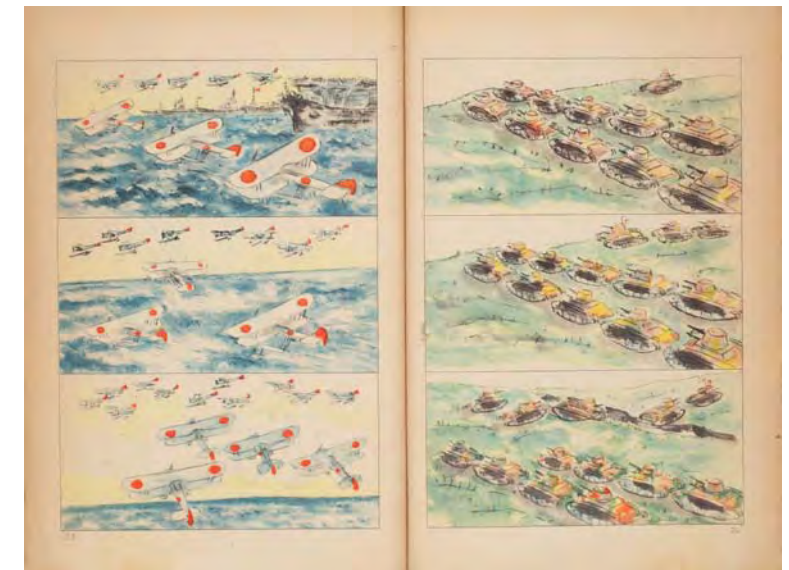
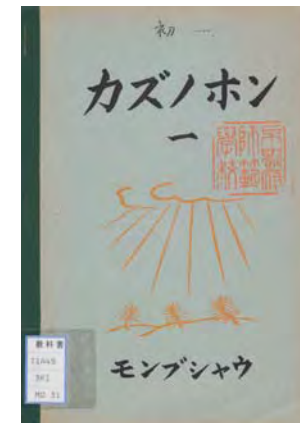
京都教育大学附属図書館蔵

1941年(昭和16年)公布の国民学校令により教科の再編がおこなわれた。皇国の道を明らかにし、国民的自覚と信念を培い、実践させることを目的とする国民科の教科が設けられた。国民科に入れられた修身はもともと個人が身を修めるものであったが、第5期の教科書では、皇国民育成へと個人を教化する科目に転化している。写真掲載箇所は「ハンザイ」の教材であり、1年生用の『教師用』書では、この教材について「天皇陛下の御為身を捨て命を捧げて、おつかえすることは、私たち臣民の一番大切なつとめである。私たちは、一朝事あるとき、召されるままにそれを名誉としていさに出かけ、死んでもなお天皇陛下の御為、皇国の為に働く覚悟がなければならない」と指導するよう記してある。教材に、殉死、戦死を取り扱ったものも多く、『初等科修身三』には「佐久間挺長の遺書」「軍神のおもかげ」「特別攻撃隊」などがある。(村上)

カズノホン 一 (国民学校初等科1年生用)

京都教育大学附属図書館蔵

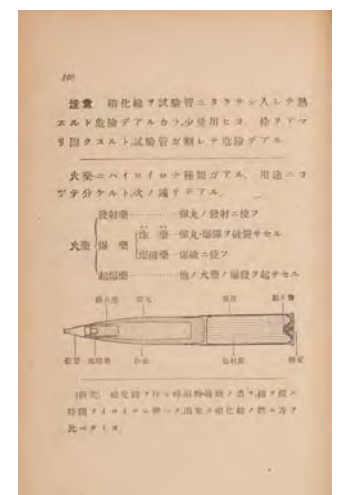
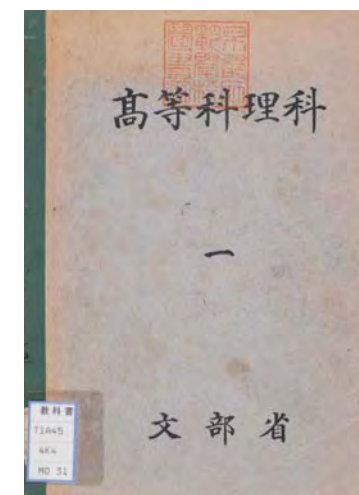
国民学校で使用された算数の教科書に、軍事色が強い教材が入っている。「数の増減」の単元では、挿絵に色鮮やかな戦車と艦載の水上飛行機を使っている。『教師用』書では、左下の挿絵を利用した発問の具体例として「さっきの11台が勇ましくこちらの方へ飛んできます。そこへまた4台手前の方から飛び上がりました。みんなで何台になるでしょう」と記されている。算数にも訓話的な記述が入り、「きょうは天長節〔天皇誕生日〕です。どの家にも日の丸の旗が出ています(〔 〕内は筆者注)」「カズノホン三)とか、「私たちも、郷土の神社参拝に歩いて回る予定を立てましょう(初等科算数七)がある。初等科卒業前の6年生が使う『初等科算数八』の教科書には、400人の歩兵が川を渡るのにかかる時間、味方の爆撃機が敵艦の上空に達する時間、などを児童に計算させている。(村上)

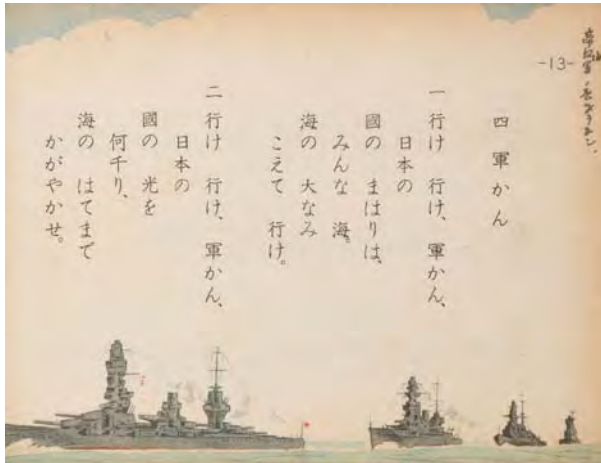


高等科理科 一 (国民学校高等科1年生用)

京都教育大学附属図書館蔵

男子にとって兵隊になることは国民の義務であり、兵士の資質を高めるために学校で科学的素養を高める必要があった。高等科1年の理科の教科書に、繊維と火薬の単元があり、その導入部分で、「火薬は戦争にたくさん使われ、きわめて重要なものである。強力であって取り扱いやすい火薬を発明したら、どんなに役に立つことであろう」と記され、弾丸の内部の図と、使用される火薬を説明している。砲弾には、用途で分けると4種類もの火薬が使われていることがわかる。『初等科理科三』(初等科5年生用)の金物の単元では、「私たちは、いつも気をつけていて、金物をむだなく使い、少しでも捨てないで役につけてよう。いらなくなった金物を集めて、学校へ持ちよう」と、当時の金属不足の状況下で、児童に金物集めを促している。(村上)





うたのほん 下 (国民学校初等科2年生用)

京都教育大学附属図書館蔵

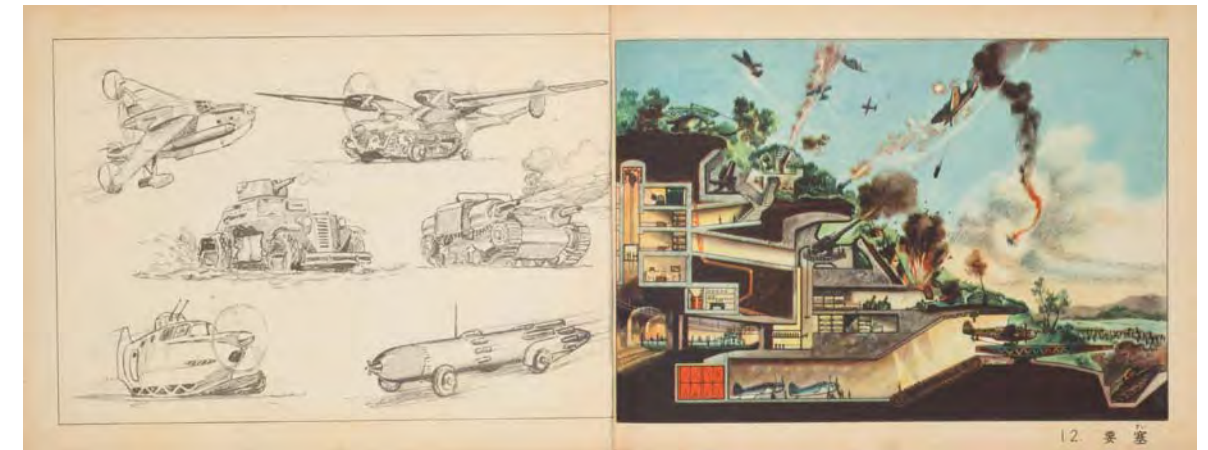
国民学校令により、それまでの「唱歌」は「芸能科音楽」の科目名になり、音楽の国定教科書が初めて作られた。1年生になって習う歌の18番目に「兵タイゴッコ」がある。『教師用』書には指導の要旨として、勇ましい兵たいごっここの歌曲を歌わせて、勇壮活発の精神を養う、とある。2年生では戦争に関連する3つの歌が掲載されている。写真掲載している「軍かん」の歌の指導要旨は、帝国軍艦の使命と威力を歌わせて、海国民の意気を休得させ、国民精神を昂揚する、とある。「兵たいさん」では、勇ましい兵たいさんの歌を歌わせて、勇壮活発の精神を養い、かつ軍事思想を鼓吹して忠君愛国の念を培う、とある。4年生には戦死者の帰国を扱う「無言のがいせん」の歌があり、児童に「おぢさんあなたが手本です」と歌わせる。この歌の指導要旨には、「護国の英霊を迎える歌を歌わせて、英霊に感謝の心を捧げ、国民的情操の醇化に資する」とある。(村上)



初等科図画 四 男子用 (国民学校初等科6年生用)

京都教育大学附属図書館蔵

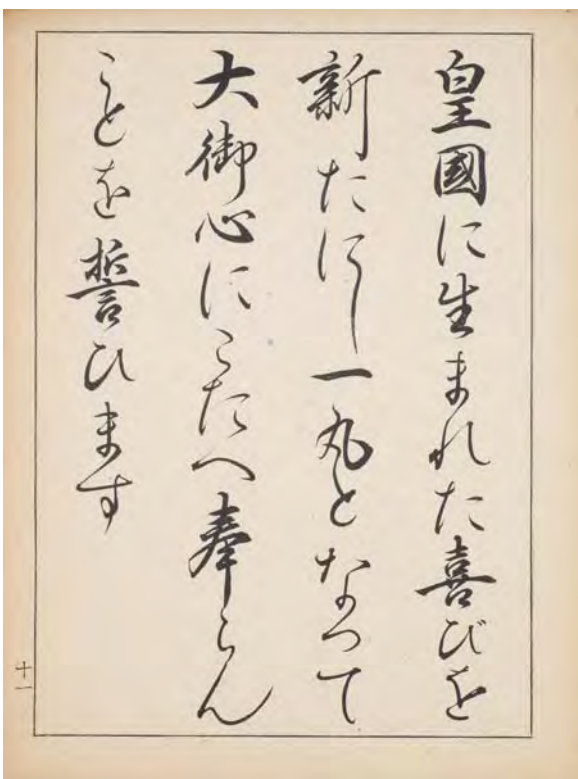
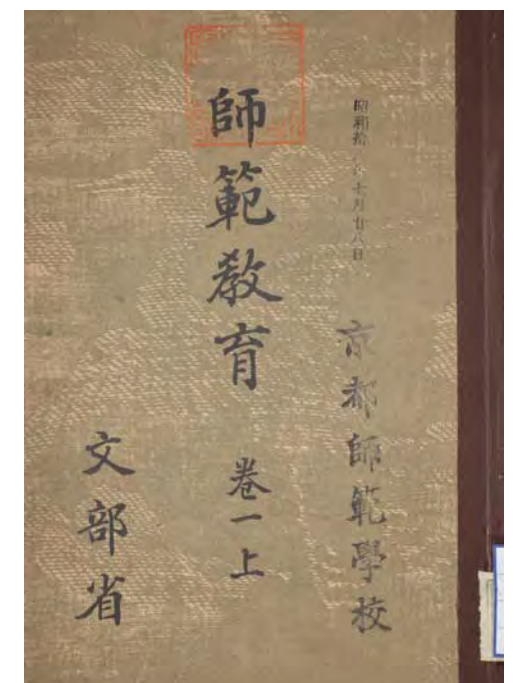
4年生から6年生までの図画の教科書は、男子用と女子用にわかれており、題材が少しずつ異なっている。「要塞」のページは男子のみの教材である。『教師用』書には、指導の要旨として、児童の創造的空想に基づき、要塞の断面図を設計考案させ、説明図的な表現法に慣れさせるとともに、国防思想の涵養に資する、とある。男子のみの教材には、「行軍」「演習」がある。女子のみの教材には、「いもん袋」がある。銃後を守る少国民への男女共通の教材として、6年生用の「配色」の教材では、防空のための迷彩色を教える。4年生で「隣り組」の教材があり、『教師用』書には、子どもは隣り組に回覧板を持っていったり、家で会合が開かれたりするので、隣り組についての関心を高めるよう、国家的立場から積極的に指導しなくてはならない、と記す。(村上)



師範教育 巻一上 (師範学校生徒用)

京都教育大学附属図書館蔵

全国の師範学校が1943年(昭和18年)の師範教育令の改正により官立になると、同時に師範学校で使われる教科書も国定教科書となった。師範学校で教えられる教科の1つに教育科があり、その中は教育・心理・衛生の3つの科目にわかれる。教育科の教育は、「わが国教育の本義を明らかにすると共に、国民教育の要諦を会得」させることを目的とする。『師範教育巻一』は、「教育の史的発達」を扱った教科書である。皇国史観に立ち、「わが国は万世一系の天皇、皇祖の神勅を奉じて無窮にこれを統治し給う」で教育史の記述が始まる。「大東亜戦争と教育」の項では、「大東亜戦争は、東亜の禍乱を助長し東洋覇權の非望を逞しくせんとする米英に対して、皇国が蹶然起って一切の障害を破碎せんとする自存自衛の戦いである」と規定しており、国民学校において大東亜の建設者として健全有為な皇国民を育成することを目指している。(村上)



初等科習字 四 (国民学校初等科6年生用)

京都教育大学附属図書館蔵

1年生の習字の教科書『テホン上』は、「ヒノマル」「キミガヨ」そして「クニヲマモレ」を教材としている。3年生から教科書名が初等科習字と変わる。『教師用』書では、教材についての取材先を記してある。例えば、『初等科習字一』で扱う教材は、肇国の神話に取材した教材「神代天の岩戸」、軍事に因んだ教材「軍用犬少年兵」、時局に因んだ教材「寄せ書き千人針」、日本精神に因んだ教材「大和心武士道」、などの分類である。ここに写真を掲載したページは、皇国民の志気を教材とした「常会の誓い」に取材した教材である。戦前は、戦時体制に協力する住民組織の末端装置として隣り組が組織されていた。上からの通達事項を徹底するため「定例常会」を開くことを義務づけており、その出席範囲、司会、進行順序まで決められていた。教科書ではその「常会の誓い」の後半部を教材としている。(村上)

京都教育大学周辺の戦争遺跡

しだんばしのプレート 師団橋の橋脚 (五芒星の浮き彫り)

師団街道と第一軍道の標識

師団街道の標識

紀元 2601 年の石碑

伏見稲荷

稲荷

京都府警察学校 (京都陸軍兵器支廠)

龍谷大学 (京都陸軍兵器支廠)

第一軍道

師団街道

第二軍道

深草墓園 (陸軍墓地)

軍人湯 (銭湯) の看板

八紘一宇の石碑

満州事变戦病没者 合同墓碑

戦病死者合葬碑 明治 36 年戦没兵卒 戦病死者合葬碑

陸軍用地の標識

聖母女学院本館 (旧陸軍第 16 師団司令部庁舎)

深草小学校 (騎兵第 20 連隊)

藤森中学校 青少年科学センター (野砲兵第 22 連隊)

藤森 (師団前)

京都医療センター (京都衛戍病院)

騎兵第 20 連隊跡の碑

京都陸軍病院の碑

京都教育大学 附属高等学校 (輜重兵第 16 大隊)

伏見税務署 (京都憲兵隊)

藤森社

京都教育大学 (歩兵第 9 連隊)

JR 藤森

京都医療センター

まなびの森ミュージアム (旧歩兵第 19 旅団司令部)

馬つなぎ (拡大)

馬つなぎ

旧南門

忠魂碑

京都歩兵連隊の碑

退営記念絵馬

鎮魂奉納絵馬

旧歩哨舎

旧陸軍第 16 師団輜重部隊遺跡

京都教育大学キャンパスの昔



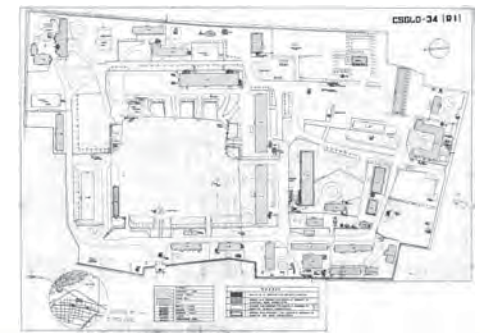
絵はがき

武島良成氏蔵

歩兵第9連隊の正門（現在の京都教育大学西門に相当）を写した絵はがき。「武勳輝く歩兵第九聯隊（正門）」との記載がある。深草に歩兵連隊が置かれたのは1887年（明治30年）のことで、当初は歩兵第38連隊だったが、1925年（大正14年）に第9連隊へ変更された。その第9連隊は、1944年（昭和19年）10月からのレイテ島の戦いで全滅してしまう。本資料と同時に作られたと思われる絵はがき（武島氏蔵）には、「栄光に輝く将校の集ひ（歩九将校集会所）」と記すものもある。（吉江）

建物配置図（米軍キャンプ・フィッシャー時代）

歩兵連隊跡地に駐留した米軍キャンプ・フィッシャー時代の建物配置図。占領以後の建造物、占領以前から続く一時的建築物（主要建物とそれ以外）、占領以前からの永続的建築物にわけて表現され、本資料からは、主要建物の多くが旧陸軍時代のものを引き継いだことが判明する。もっとも、利用にあたっては改装を要したようで、京都学芸大学が移転してきた時の『京都新聞』によると、政府は米軍駐留に際して、建物の耐震・耐火化や主要道路の舗装化などの施設整備に、2億5000万円もの巨額をつぎ込んだとされる。（吉江）



京都教育大学の「地下壕」？

～京都教育大は「歩兵第九連隊」跡である。……京教大には、長く枝分かれした「地下壕」があり、地上の換気口をたどれば詳細はわかる。ちなみに大学構内には、電柱はまったく見られない。～
戦争遺跡保存全国ネットワーク編『戦争遺跡から学ぶ』（岩波ジュニア新書、2003年）

旧陸軍歩兵連隊の跡地に立地する京都教育大学。この地下に、戦前に掘られた「地下壕」がめぐっているという言説は、上記の文献をはじめとして、しばしば目にする事ができる。こうした文献に依拠してか、テレビ局から取材の申し込みがきたこともあり、学生の間には、「地下壕」案内ツアーなるものが存在するとの噂も耳にすることがある。

しかし、この「地下壕」、実のところは、1980年度（昭和55年度）に完工した共同溝のこと。断面2m×2m程度の鉄筋コンクリート製のトンネルを地下にめぐらし、この中に給水管や送電線、ガス管など、多くの管を配している。共同溝が作られる以前には、給水管などの管が別個に埋設されていたため、保守や点検は困難をとまなうものであった。また、旧陸軍の施設をそのまま使用していたことから、老朽化も深刻な問題となっていた。これらを解決するため、総工費7億2900万円をかけて共同溝を整備したというのが、「地下壕」の真実である。

もっとも、それ以前に「地下壕」が存在したのではといわれると、それを完全に否定することはむずかしい。しかし、いまある共同溝からは、「地下壕」を再利用した形跡を見いだすことはできず、配置図を見ると、現在の建物配置を意識して、地上道路に沿って掘られていることが明白である。さらに、輜重兵部隊跡地に立地する附属高等学校をはじめとして、付近の軍用地利用施設に「地下壕」の存在は知られておらず、歩兵連隊のみに「地下壕」があったとするのは、不自然とせざるをえないものがある。

やはり「地下壕」は、一種の都市伝説とするよりほかにないようである。伝説が登場したこと自体は興味深いものの、総延長1.3kmもの共同溝は、知らずに入ると抜け出られなくなる危険をとまなう。伝説に固執することは、史実を見誤る危険さもあることを、十分に認識しなければならないだろう。（吉江）



子どもたちの平和学習

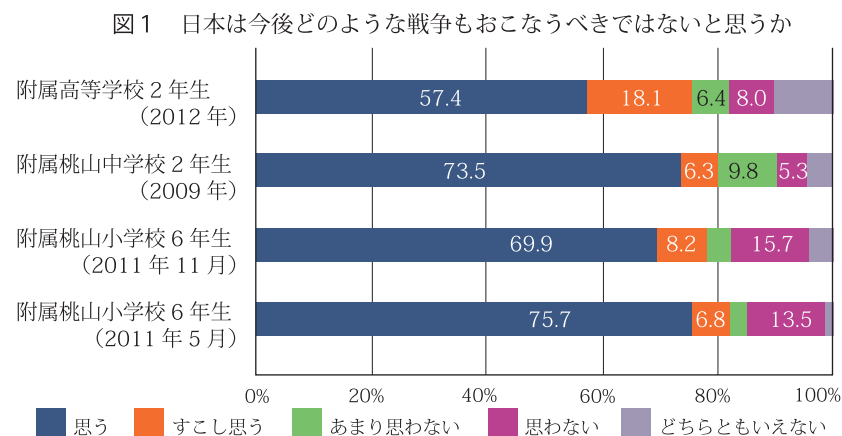
67年以上前に終わった戦争の歴史を、子どもたちが興味を持って学ぶためには、「人」や「場所」でつながる必要がある。ただし、第二次世界大戦について家族から聞く割合は低くなった。2012年(平成24年)2月の意識調査によれば、京都教育大学附属高等学校2年生が第二次世界大戦について、祖父母から聞いた割合は52%、父母から聞いた割合は14%にすぎない。附属桃山小学校6年生では、祖父母から35%と下がり、父母からは上がって29%となっている。これは祖父母自体が戦後生まれの世代になった影響といえよう。戦争について子どもたちが最も多く聞くのはテレビからで、附属桃山小学校で56%、附属高等学校で76%である。広島や沖縄に修学旅行で行く学校は多いが、さらに伏見区内にある戦争遺跡の地域教材を用いて平和学習を進めることができよう。

「京都教育大学周辺の戦争遺跡」に記載されている軍関連施設跡や戦争記念碑を、フィールドワークすることができる。実際に師団街道や軍道を通して各施設跡を歩き回ることにより、当時の陸軍基地の広がりやを体感することができよう。歩きながら師団の各施設・部隊の配置やつながりを考えることで、当時の兵隊の移動や、施設相互の関係、基地周辺にある商店や人々の生活を想像することができよう。

京都教育大学に関連するものとして、大学の藤森キャンパスには旧第19旅団司令部の建物があり、「まなびの森ミュージアム」になっている。附属高等学校は輜重兵部隊しちようの跡地に建ち、附属高校の南門の前には、輜重兵部隊の南門が移設・保存されている。また、附属特別支援学校はかつて陸軍の小銃射撃場であり、緩い傾斜地の谷間にあるのは銃弾がそれにくいためであった。

伏見に駐屯した第16師団は、日中戦争で上海や南京に派兵され、太平洋戦争が始まるとフィリピンへと転戦する。1944年(昭和19年)にフィリピンのレイテ島で米軍と戦い、ついには壊滅し、将兵のほとんどが亡くなってしまふ。第16師団が派兵された後、軍都伏見では新たな部隊が編成され、次々に戦場に派兵された。伏見で編成された部隊の戦歴を調べることで、日本とアジア太平洋の戦争の関係を見ることもできよう。また読み物として、水上勉が著した『兵卒の鬘たてがみ』がある。これは、輜重兵部隊に入営した新兵の様子を描いた小説であり、当時の軍隊の内実とともに、いかに兵隊の人格が軽視されていたかがわかる。

現在の子どもたちの平和意識として、日本国憲法第9条が規定する戦争放棄について、附属学校の児童・生徒に質問した。図1によれば、日本は今後どのような戦争もおこなうべきでない、と思う児童や生徒が多いことがわかる。(村上)



展示品目録

戦時下の京都師範学校

京都師範学校長作成文書	1冊	京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム
戦災者に対する諸手当一件	1冊	京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム
教練用木銃	1点	京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム

戦時中の教科書

ヨイコドモ 上 (国民学校初等科1年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
ヨイコドモ 上 (教師用)	1冊	京都教育大学附属図書館
ヨミカタ 二 (国民学校初等科1年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
初等科国史 下 (国民学校初等科6年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
初等科地理 下 (国民学校初等科6年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
初等科地理 下 (教師用)	1冊	京都教育大学附属図書館
カズノホン 一 (国民学校初等科1年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
初等科算数 八 (国民学校初等科6年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
高等科理科 一 (国民学校高等科1年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
ウタノホン 上 (国民学校初等科2年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
初等科音楽 二 (国民学校初等科4年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
テホン 上 (国民学校初等科1年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
初等科習字 四 (国民学校初等科6年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
初等科図画 三 女子用 (国民学校初等科5年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
初等科図画 四 男子用 (国民学校初等科6年生用)	1冊	京都教育大学附属図書館
CURRENT ENGLISH READERS V (中学校生徒用)	1冊	京都教育大学附属図書館
師範教育 巻一上・下 (師範学校生徒用)	2冊	京都教育大学附属図書館
協和国語読本 (朝鮮出身内地在住成人用)	2冊	京都教育大学附属図書館
陸軍科学研究所指導 欧州大戦間使用せる主要毒物標本	1点	京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム

京都教育大学周辺の戦争遺跡

鉄 帽	1点	立命館大学国際平和ミュージアム
絵はがき (工兵第16大隊関連)	11点	武島良成氏
絵はがき (野砲兵第22連隊関連)	1点	武島良成氏
師 朋	1冊	京都教育大学附属図書館
京師卒60周年記念誌 わが京師	1冊	京都教育大学附属図書館
卒業70周年記念誌	1冊	京都教育大学附属図書館

京都教育大学キャンパスの昔

私たちのビルマ戦記「安」歩兵第128連隊回想録	1冊	武島良成氏
絵はがき (歩兵第9連隊関連)	2点	武島良成氏
建物配置図 (米軍キャンプ・フィッシャー時代)	1点	京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム
水上勉全集 15	1冊	村上登司文氏

発行日：平成 24 年 11 月 10 日

発 行：京都教育大学 教育資料館 まなびの森ミュージアム

連絡先：〒612-8522

京都市伏見区深草藤森 1 番地

Tel:075-644-8840/8175

印刷所：株式会社 コームラ